

## 六根清浄

大塚喜子

民家の軒下の櫛の木の切り株の上に荷袋を置くと、ため息をつきながら空を見あげた。雪は一向に止みそうにない。荷袋の中に三反の反物と二幅の掛け軸が入っている。行商を始めて半年になる。今日は一つも売れていない。背中の赤子が腹を空かして乳を欲しがっている。先ずは腹に何か入れなければならぬ。腰に括りつけた風呂敷包みを解き、冷えた蒸かし芋を喰う。朝方に大根飯を食べて、今日はこれが二回目の食事である。銘仙を仕立て直した上着の胸をはだけると、無心に乳を吸う赤子の口元から、もう片方の乳房からも乳が溢れる。幸い母親が空腹でも乳は涸れない。

「陽子ちゃん、ごめんね。腹ペコだったよね」雪がかからないように、娘の頭にネンネコ半纏を被せた。

昭和二十一年、達子は二十三歳になる。戦争は終わったのに町役場で働いていた夫は帰ってこない。結婚生活は三年で終わった。夫が出征した時、お腹にいた陽子がこうして七か月に、ヨチヨチ歩き始めていた息子の彰は二歳になる。舅や姑は、嫁と孫らを可愛がってくれるが、米櫃はいつも空で、達子が食い扶持を気兼ねするのは仕方がなかった。そんな訳で、婚家から遠くない、奥出雲横田町の実家に子供を連れて戻ってきた。

父親は、嫁に行く前の年に亡くなり、病弱だった母親も、達子が帰った翌月に数日間寝込んだだけで、あつと言う間に亡くなった。達子は夫や母の死を悲しんでばかりはいられない、二人の子供を育てなければならぬ。

彼女は行商を始めた。陽子をおぶい、彰の手を引いて、毎日反物や掛け軸を売り歩いた。あらゆる物資が不足していたから、買ってくれる人はいるが、全部を売り切ることには滅多になかった。それでも、配給の牛乳や砂糖を気兼ねなく子等にやれるのは嬉しかった。

「特別いい反物です。安くしておきます。高名な作家の掛け軸です」等と粗悪な人絹の反物や、欺作家の掛け軸を客の前に広げる時もあるが、何はともかく、宍道や松江の古物商から品物を仕入れて、毎日行商に励んだ。今日は一里の道を歩いて三成町まで来ている。街並みの一軒一軒に声をかけて廻ったが、一つ

も売れていない。雪の降るこんな寒い日に、家々の女たちはわざわざ玄関口に出てきて行商人の相手はしない。「反物と掛け軸を持ってきました」という達子の声に、奥の炬燵の中から「マア：間に合っているわ」の素っ気ない返事が返ってくる。仕方なく引き戸を閉めるしかなかった。

今日は近くの寺に彰を預けて家を出た。赤子を背に、幼子の手を引いて行商に出ようとする達子を、長和寺の住職の奥さんが「預かってやるから、一人置いていけ！」と言ってくれたのだ。達子はその言葉が嬉しくて有難くて、空模様を考えずに歩き出してしまった。

軒下で乳を飲ませ終わると、襦袢を脱いで半身、裸になった。赤子を自分の肌直につけておぶうと、その上から襦袢と上着を着た。サツマイモを包んでいた風呂敷を陽子の首に巻いて、ネンネコ半纏を着て、更に上から外套を着た。手には、売れずにある掛け軸と反物が入った荷袋を持った。軒先を借りているこの家の居間に早々と明かりがついた。雪は一向に止みそうにない。ここから町はずれまで、先に歩いた人がつけた細い雪道ができている。その先に道はないかも知れない。一面の雪の原でも、電信柱に沿って歩けば、道を逸れることはないはずだ。達子は一步を踏み出した。雪は膝の下の高さであり、頭巾の上にも、外套の肩にも容赦なく積もる。急ごうとするが積雪の高さが達子の歩行を遅らせる。

「陽子ちゃん、お目覚めしていてね。お願いだよ、寝ないでね」手をまわして背中をトントンと叩くと、陽子が足をバタバタさせて「ウ〜ウ〜」と答えてくれる。その声に励まされて達子は歩く。大変なことは判っている。雪さえなければ、この道は一時間ほどだが、今日はどのくらいかかるのか見当がつかない。長靴はしっかりと紐で結んだのに、踵が濡れてきた。そんなことに構ってはいられない、彰の所に帰らなければ：帰らなければならない。

「よいしょ、ソーレ、こらしよ、六根清浄、六根清浄」一心不乱に歩く達子の視界の先に、こちらに向かってくる小さな明かりがある。箕をつけ、編み笠を被った屈強な男が持つランプの明かりは、真つすぐに達子に向かってくる。

「なんだよおめえ？こんな雪の中サ、一人で歩いているのか。どこに行くだ。埋まって歩けなくなるゾ。凍え死んじまうゾ。氣イは確か：」達子は声が出ない。暗くなりかけたこんな時間に、道のない雪の中を歩いている自分は尋常に見えないかもしれない。そんなことは言われなくても判っている。

「ドコ：行くか俺様が聞いているだよ」この顔に見覚えがある。四十歳半ばの横



手をつき渾身の力を込めて立ち上がった。

「陽子ちゃん痛くなかったかい」「ウウ…」娘の声を聞いてホッとして、手提げ袋を拾いあげた。よくぞ出たと思うような、奇怪な声を張り上げたから、喉はカラカラだ。込み上げてくる悔しい気持ちを飲み込もうとして、雪をつかんで、握りしめて、口いっぱい頬張って、思いの限りに吐き捨てた。それでか、涙は出なかった。

(彰のところへ帰らなければならぬ。息子のところへ、何としても帰らなければならぬ。私は正気だ。狂ってなんかいない。この雪の中を歩かなければならない。今自分がしなければならぬことは歩くことだ)

達子の一歩が雪をかき分ける。次の一歩がまた雪をかき分ける。ここで立ち止まれば、あの男の言うように凍え死ぬかもしれない。雪は降り続いて、もう少しで太腿半分が埋まるほどの積雪になった。こんな日に、行商に出た自分の考えが甘かった。

「よいしょ。よいしょ…六根清浄…六根清浄」掛け声だけが自分を勇気づける。歩き出して2時間ぐらいは経つたろう。顔に受ける寒気が更にきつくなってきた。

「陽子ちゃん。寒いネ、ごめんネ」

「ウーウー」陽子の声を聞くとしてホッとす。おむつを替えてやりたいが、どうすることもできない。

「頑張つて…兄ちゃんのところへ帰ろうネ」言いながら、前に出した右足に痛みが走った。左足に更なる激痛が走って、達子は直立不動で空を仰いだ…と赤子共々宙に浮いて(眩暈だ、シツカリしなければならぬ)前にのめって、倒れた。(陽子ちゃんごめんネ…彰ごめんネ)必死で起き上がろうとする気持ちの一方で、雪の中が心地よくて、立ち上がれない。起き上がれない)

夫の戦死を知ってから十カ月になる。子供を育てなければならぬという気負いだけで過ごしてきた。隣町まで行商をする達子の細い体を、張り詰めた気力だけが支えていた。

「達子、大丈夫か、しっかりしろ。足は痛むか？少しだけ動かしてみろ、動く

か？動かしてみろ、動いてくれ、動かないか」夫の声がする。

「どこにいるの。あなた、来てくれたの：来てくれたのね。いや違うよね。あなた：でないよね？サイパンで死んだんだよね。役場から聞いたヨあんたは戦死したって」

「達子。起き上がれ。頑張れ。起き上がるんだ。このまま眠ったら、陽子とお前は死んでしまうぞ。そこに行って起こしてやりたいが、自分にはそれができない。頼む、頼むから達子：起きてくれ：起き上がれ」雪の向こうから、雪雲の向こうから聞こえてくるのは、夫の声だ。懐かしい夫の声だ。張り詰めていた意識が緩んでいく。声にすがって、目を開けると、顔が見えた。優しく、色白で、昔のままの夫の顔だ。

（あなた。あなたの処に行きたい。あなたが帰ってこれないなら、私がそっちに行く。あなたの所へ行く。俺のところに来いと言って：。あたしは意気地なしの母親だ。一人で子供を育てられない。こんな弱虫の母親では子供がかわいそういだ。だから私がそっちに行く）朦朧として、夫の手にすがろうとするのに、その夫の手が見つからない。顔は目の前にあるのに、手が見つからない。見つけれない。

「そうか。もう駄目か、俺のところに来るか？陽子を連れてこっちへ来るか？」領きながら達子は尚も夫の手を探した。

「いやダメだ。彰はどうするんだ。まだ二歳だぞ。彰をどうするんだ。彰は今、寺の庫裡で母親の名前を呼んで泣いているぞ。達子、起きろ。歩け。歩いてくれ。俺が何とかするから：俺がなんとかするから：歩いてくれ」

見上げると、雪は止んでいる（あんたが降らないようにしてくれただね。ありがとう。私を励ましに来てくれたんだね。私は死んでいられないね。頑張るよ）雲の間から月が見えてきた。

「陽子ちゃん、お月さんだよ。父ちゃんが頑張れって言うてるよ。兄ちゃんのところへ帰ろうね」足の痛みを耐えて雪をかき分ける。彰の元へ、息子の元へ帰らなければならぬ。こんな雪に負けていられない。なのに、再び眩暈が襲って、達子は雪の中に沈んだ。

耳元で声がする。「死んでるの？気を失っているの：お前さん：大丈夫かい：」明らかに夫の声ではない、然も女の声だ。

「さあ、立ち上がってごらん。立たせてあげよう：」目を開けると、自分を覗

き込んでいるのは三十歳半ばの切れ長な目をした女だった。女は藁で編んだ雪靴を履き、外套の上から大きな黒い角巻で全身を包んでいる。艶やか黒髪が、雪明りの中で光って、揺れて達子の頬に触れる。その香りが何とも良い。梅の香りだ、いや夫の好きな出雲牡丹の香りだ。女は尋常でない腕力で、母子を立ち上がらせて、引いてきたソリに引き上げると、藁筒の中から瓶を取り出して、吸い口を達子の口元に当てた。一口の湯が身体の隅々まで、赤子にまでも届いた。

「赤ん坊は死んでいないかい。凍え死んでいないかい」言われて、ハツとして「陽子ちゃん、陽子ちゃん」と声をかけながら、背中をゆすると、温もった小さな足が嬉しそうに動いた。

「生きている！」安堵して、ソリの上で崩れそうになると、女は達子を抱きかかえてくれた。

「隣町から一人で歩いてきたの？この雪でここまで歩くには時間がかかったでしょう。赤ん坊も腹を空かしているよ。可哀そうだよ」女は赤子に乳を飲ませるように言ってくれた。皮膚を突く寒気が顔にも手にも痛いこの雪原で、背中の子を下すのは無理だろうと首を振ると、女は自分の角巻の両端を持って、達子をスッポリと囲ってくれた

「あったかい、温い！魔法のようだよ」角巻で囲われて、陽子を下すと、女はさらに自分が着ていた外套の裾を広げて母子を引き寄せた。陽子はオムツを替えてもらって足をバタバタしながら、乳をほしがっている。

「ホラはやく、早く乳を飲ませなさい」

お乳を飲ませる達子と赤ん坊を、女は広げた外套でシッカリ囲ってくれている。能面のようだった目元が優しくなって、赤子の顔をまじまじと見ながら

「お前さんはどこまでいくの？」

「横田町に帰ります」

「そこに家族がいるの？」

「息子が私の帰りを待っています」

「お前さんは子供が二人いるの？」

「二歳になる男の子もいます」

「フーン二人もいるの。二人も子供がいるのに、こんな大きな荷物しよって、暗い大雪の道さ歩いたらだめだよ」

「はい姉さまに会っていませんでしたら、私とこの子は、今頃どうなっていたやら。お陰様で、命拾いしました」

「ほんに：お前さんは二人も子供があつて幸せだわ。自分には子供がない。いなくなつちまつた」

「ん：なぜいなくなったの？」

女は何度か目を伏せながら、ポツリポツリと話し出した。

「あれは今日みたいな大雪の日だった。

私の四歳の男の子は大馬木（オオマキ）川に流された。色白で賢くて、目が大きかったワ。夕方に子を寝かせつけて、雪の下の大根を掘りに家を出たんだ。納屋の前の雪を掻いていて、胸騒ぎがして、急いで戻ったら子供はいなかった。寝ていたはずなのに、目を覚まして母親を探して後を追つたんだ。みんなして田んぼの外まで、夜通し探したが、子の足跡は積もつた雪に消されてしまった。神隠しにあつたと人に言われた。雪が解けて、春になつても、子供の姿は見つからなかったワ」

「なんとまあ気の毒な事で、それで、姉様はこれからどこへ行かれるのですか」返事がない。遠くを見ていた女の目が、みるみる吊り上がつて達子を見据えろと

「寺までこのソリで送るから、赤ん坊を私に呉れ。お前にはもう一人子がいる。なのに、自分には子がいない」驚いた達子は半纏の襟を直した。乳房を奪われて、大声で泣く陽子を抱きかかえて、女の顔を見据えながら

「自分は戦争未亡人で、戦死した夫のためにも二人の子供を育てなければならぬ。夫は戦死したけれども、三人を、守ってくれている」と話した。

「よく考えなさい。このご時勢だ、女手一つで子供を育てるのは並大抵ではない。自分に呉れたら、自分だったら、赤子を育てられる。乳も飯も、腹いっぱい食わせる。着るものだって暖かいものを着せられる」

女は微動だにしないで、話し続ける。のっぺりした顔を赤ん坊に近づけて「おばさんの子にならないかい。大事にするよ」と言いながら、達子の腕から赤子をはぎ取って、素早く自分の外套に包み込んだ。

「私の子供をかえして」女の足にしがみつくくと、女は達子を足で蹴った。我が子を取り返そうと、しがみつく達子を女は何度も足蹴にした。ソリから投げ出されて

「お願い。子供を返して」必死の形相でしがみつく達子に、根尽きた女は無言で赤子を達子に抱かせた。すかさず、達子は陽子をねんね半纏で包んで、抱きしめた。女はそれを見届けると、無言で力なくソリを引き、去っていった。

達子は赤子をおぶって、半纏を着て外套を羽織って、再び道のない道を歩き出した（いったいどのあたりまで来たんだろう。寺は遠くはないはずだ）一歩一歩進んでいると

「これに乗りなさい」音もなく戻ってきた先ほどの女がソリを指さした。

「さっきは悪かった。赤子があんまり可愛かったので、あんなこと言いちゃった。子供は親が育てるのが一番だ。お前は子供がいるから生きられるんだね。女は子供と離れたら生きられない」細い目から涙がながれている。女は母子と荷物をソリに乗せた。

「さあ、寺の前まで送ってやるから」達子は女の申し出が有難くて、無言で頭を下げた。女はソリを引いた。

「ほれ、寺の前だわ」達子には、ほんの数分にしか思えなかったが、ソリは長和寺の庫裡の前に着いた。寺の明かりを背に「姉様、ありがとうございました」と言って顔を上げると、既に長い黒髪が右に揺れ、左に揺れて雪の中に小さく消えて行くところだった。

やつと帰り着くことができた。庫裡の引き戸を開けて、中に足を踏み入れた途端、達子は、またしても倒れた。気がつけば、囲炉裏の側に寝かされて、傍らに住職夫婦が心配顔で達子を見守ってくれている。

「目エ覚めたか。この雪の中、あんたは、よくぞ無事で帰ってこられたナ。道に迷ってないか、凍えて動けなくなっていないかと案じていたよ。先ずは無事で良かった。よかった。子供たちは着替えて二階の炬燵で眠っているから心配しなくていい。寝ついたばかりだから、今は起こさない方がいい」住職が入れてくれた茶を飲みながら、達子は雪の中に消えた姉様の事を話し始めた。

「ふーん。そんなことがあったのか」と言いながら、何度も頷いた住職は話を聞き終わると、納戸から木箱を持ち出して、昭和十五年二月四日付けの色褪せた山陰日日新聞を取り出した。

亀嵩村主婦山田シメ（二十三歳）さんは二日未明、仁多郡三成の大馬木川中流の『鬼の舌震』の岩壁から転落。下流で町民により発見され、死亡が確認された。警察は投身自殺を図ったものと見ている。

「何とも不思議なことだ。シメさんの児が大馬木川に流されたのもこんな雪の

日だったよ」住職夫婦と達子は新聞の紙面に手を合わせた。

おわり

鬼の舌震い　奥出雲の大馬木川中流に位置する溪谷。鬼がヤマタノオロチに責められて、舌を震わせ退散したと言われている。